第5回「〈新〉植民地主義論の射程」

はじめに

西　成彦

まず私事から始めさせていただきますが，さる10月28日は西川長夫さんの御命日でした。じつは，昨年，西川長夫さんが亡くなられる四日前に，私は直々にお手紙をいただきました。受け取ったのは三日前ですが，日付は10月24日でした。手紙の前半は，いつも通りの手書きでしたが，病状が激変してしまったため，手紙を最後までしたためることが難しく，後半はパートナーの西川祐子さんに口述筆記してもらいましたといった趣旨の文章を添えて，ワープロ打ちされた全文が同封してありました。手紙の中身は仕事に関わるプライベートな中身ですので触れませんが，最後に「人それぞれの闘い方があるのだから，西さんはご自身の闘い方でがんばってください」とありました。まず，このことばを西川先生の「遺言」のひとつとして，お集まりの皆さんと分かち合いたいと思います。

西川さんは，2012年12月29日付の「廃墟と生体体験」という文章のなかで，《他者が生者の立場から「私の死者」と呼んだり「人間の無責任」を云々することは滑稽であるし，死者に対する冒涜である》（『植民地主義の時代を生きて』p. 570）と書かれています。西川長夫さんは，すべての重荷をこの地上に残して逝かれました。この下ろしていかれた重荷は，「万人向けの，しかし何びとに向けられたのでもない」（ニーチェ）重たいものだと思います。西川さんがやり残されたことは，どんなに重たい課題でも，私たちがひとりひとり受け継いでいくしかないのでしょう。

西川長夫さんの死は，私たちをしばし暗闇に追いこみましたが，少なくとも，残された数々の著作や，お付き合いのなかでの言葉の思い出などを，私たちは文字通り「贈り物」として，嬉々としながら受け取らなければなりません。

ドイツ語を少しでも学ばれた方は，ドイツ語のGiftが「毒」poisonの意味だと知ったとき，驚かれたことがおありでしょう。西川さんの仕事は，さまざまな「毒」を内に含んでいました。それはときには私たちを「中毒」にさせるものでもあったかもしれませんし，時として「毒」が「薬」となって，そこから「希望」を与えていただいたような気分になったことも少なくないでしょう。いずれにしても，そのGiftを西川さんの置き土産のなかからとりあげるべく期待されているおのおのとして，私たちはそれぞれの闘い方を新たに発明しながら生き延びていくしかありません。

◆

さて，「西川長夫／業績とその批判的検討」と題されたこの連続講座も，今日の「第5回」で最終回になります。西川さんの多岐に及ぶお仕事のなかから「戦後小説論」「大学論」「国民国家論」などを取り上げてきましたが，今日の「第5回」は，「〈新〉植民地主義論の射程」とい

うことで，西川さんが最後の十数年とりわけこだわってこられた「植民地主義」という言葉を，私たちがどう引きとり，受け継いでいくかということを，ゲストの四名とともに考えていきたいと思います。

カール・マルクスの『資本論』がそうであったように，西川さんの「国民国家論」や，あるいは「多文化主義論」は，あくまでもそれを乗り越えるための批判的考察からなっていました。しかし，世間は「国家が国民の国家で何が悪い」，あるいは「多文化共生，すばらしいじゃないか」と，批判的な議論こそが逆手に取られることの連続だった気がします。その起源を問い，その安易な肯定をこそ疑おうとされた西川さんにとって，いまの日本，いまの世界は，いよいよ息苦しいものになってきつつあると思います。

しかし，「植民地主義」という言葉は，少し違います。「植民地主義」は，時おり「植民地近代化論」といったような肯定論を産み出してもいますが，その言葉には「あからさまな暴力性」が書きこまれてしまっています。

西川さんが，ここ十年，「〈新〉植民地主義批判」として展開してこられた中で，その足場を築いたご自身の体験は，以下の四つであったかと思います。

1）お生まれになってから11歳までを，帝国日本の植民地で育たれたということ。

2）引揚げて来た日本が，「進駐軍」という名の「武装平定勢力」による「文明化」（「文明開化」のやり直し）を強制される植民地状況に置かれていたこと。そして，戦後日本は明治期に始まった「近代化」をいっそう強化する「国民国家」として平定されてきたのです。

3）大学でのフランス語習得過程のなかで「植民地主義的」と呼ぶしかない帝国フランスの圧迫を感じられたこと。

しかしながら，4）そのフランス植民地主義の中心で，1968年，学外研究中に遭遇した「五月革命」が，まさにそうしたさまざまに形を変えた「植民地主義」の全体を問い直そうとする運動だったという観察と洞察。しかも，その熱気は，フランスという「国民国家」という装置によってみるみる冷却されていってしまいました。その過程を西川さんはその目で確かめられました。

こうした足場の上で，「植民地主義」に対する批判に西川さんが思い切って舵を切られたのは，「グローバル化」，そして「9.11」以降の「テロ戦争」の連鎖の中においてでした。ポストコロニアル批評が次々に日本に上陸した1990年代は「国民国家論」を武器にして闘われた西川さんにとって，「植民地主義批判」なるものは，満を持してのものだったのか，それとも「戦後民主主義批判」を優先しなければならないという判断があったのか，今となってはそのあたりの戦略的判断に関しては私たちが想像をたくましくするしかないのですが，ひとつここで言っておきたいことがあります。

それは，「植民地主義」は「文明化」を口にはしても，みずからを「植民地主義」だとは名乗りません。日本の植民地主義もそうでしたし，欧米の征服・搾取・洗脳の主体も，それを「植民地主義」だと，みずからは名乗ってこなかったと思います。であればこそ，エメ・セゼールや（エ）ンクルマの「植民地主義論」の登場は，目に鮮やかなものとなったのですが，「植民地主義論」とは，そもそもが「植民地主義批判」でありました。ところが，「新植民地主義」以降の「植民地主義」は，みずからの「植民地主義性」を否認するばかりか，先行する「植民地主義」をすら忘却させて，この概念の使用を徹底的に忌避する傾向を持っていたのです。

私からすれば，日独伊のファシズムや軍国主義も植民地主義以外のなにものでもあり得ませんでしたし，ソ連や中国の覇権主義も，長いあいだ資本主義システムを封印してきていただけで，それが植民地主義的であったことは，今や明らかです。また，今日の「グローバル化」が「植民地なき植民地主義」であることもさることながら，南北アメリカ諸国含め，旧英語圏，旧スペイン語圏，旧ポルトガル語圏の新興諸国家もただ「植民地主義」の持続を「宗主国からの政治経済的独立」という形で隠蔽しているにすぎません。しかし，「国民国家で何が悪い」という言葉が蔓延することはあっても「植民地主義の何が悪いか」という言葉は，幸いにして，まだなかなかなりたたない。つまり，セゼールや（エ）ンクルマの「植民地主義論」は，「植民地主義論」を決して敵の手には渡さない，それほど強烈なものでした。

その意味で，「植民地」を色分けする帝国主義時代の「植民地主義」ではなく，資源と労働力と市場に，多国籍化した資本が群がる形の「グローバル化」を批判対象に据えるのに，おそらく「植民地主義」という言葉をあらためて「リサイクル」することは有効な戦略だと思います。

西川さんの最後の十年間は，まさにそうした「リサイクル」の試みでした。そして，まさにそうしたなかでこそ，西川さんは 11 歳までを過ごされた「植民地」での「失われた記憶」を取り戻してこられたのでした。

《私にとって朝鮮は，原風景であり原体験です。そこから絶え間なく問題が起こり，私はそこに帰っていかざるをえない。問いが投げかけられるのです。なつかしい，だが同時に朝鮮は，私に途方もない試練を負わせる場所でもあります。》（『植民地主義の時代を生きて』p. 246）

あたかもアウシュヴィッツの生き残りが，過去をふり返り，原風景を脳裡から吹き払えないもどかしさを訴えているかのような文章です。

しかし「アウシュヴィッツは終わらない」と言うべきなら，「植民地主義もまた再帰しつづける」と，現時点では叫び続けるしかないのです。

西川長夫さんの残された仕事を次世代へと継承してゆくべく，本日はその『〈新〉植民地主義論』の受け取り方を皆で考える機会にしたいと思います。